

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月27日現在

 機関番号：12601
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22520170
 研究課題名（和文）『万葉集』の語彙の表現論的研究

研究課題名（英文） A study of the vocabulary of "Manyoshu" from the view point of expression

研究代表者

 多田 一臣（TADA KAZUOMI）
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
 研究者番号：50092268

研究成果の概要（和文）：本研究では、先に代表者によって完成した『万葉集』の注釈書『万葉集全解』全7巻の本文の電子データを作成し、それをもとにすべての万葉語彙の中から、基礎となるべき語彙を150語抜き出してランク付けをし、6名の研究メンバーとの徹底した討議を経て、その詳細な語誌を作成し、新たな『万葉集辞典』を構想する際の、基礎資料の作成を行った。万葉語彙の背後にある古代人の世界像を具体的にあきらかにしえたという点で、大きな研究成果を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：I finished the explanatory note of "Manyoshu waka collection" and named it "All Manyoshu waka collection solutions". In this study, I made the electronic data of "All Manyoshu waka collection solutions". And I chose 150 core vocabularies based on the electronic data and ranked them depending on importance. Furthermore, I made the etymology of the core vocabulary with six cooperators. I clarified the world recognition of ancient people covered in "Manyoshu wanka collection". The work that this I performed is a milestone for me to make "Manyoshu waka collection dictionary".

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：『万葉集』、語彙、表現論

1. 研究開始当初の背景

『万葉集』の語彙研究は、これまで上代語一般の中で、しかも国語学の研究者を中心に薦められてきた。とりわけ『時代別国語大辞典 上代編』や『岩波古語辞典』の語誌的な説明は、きわめてすぐれた達成を示している。しか

しながら、限られたスペースの中で、その説明は必ずしも十分とはいいがたく、また上代語（ないしは古代語）一般の中での説明は、必ずしも『万葉集』の語彙そのものの適切な説明とはなりえていない恨みがあった。

研究代表者は、これまで10年以上

の『万葉集』の注釈作業を通じて、『万葉集全解』全七巻を刊行したが、その過程で『万葉集』の表現のしくみをさまざまな角度から考えてきた。その結果、一つ一つの言葉を支える世界像を考えると、そのしくみを解き明かすことはできないと確信するにいたった。『万葉集』の語彙は、和歌の言葉であることによって、まず大きく規制されている。和歌の言葉は、漢文訓読の世界で用いられる言葉と異なるのは無論のこと、祝詞や記紀に散見する和語の表現、いわゆるフルコトなども性質を異にする。それを歌言葉と言い換えてもよいが、いずれにしても枕詞や序詞などの喩的な表現までをも包括しないかぎり、『万葉集』の語彙を正確に捉えたことにはならない。そこに表現論的な視点によりつつ、『万葉集』の語彙研究がなされなければならない理由があるといえる。その先には、当然ながら新たな万葉集辞典が構想されなければならない。

万葉集辞典には、古く佐佐木信綱氏の『万葉集事典』がある。『万葉集』の用語のほぼすべてを網羅し、解説を加えた画期的な事典ではあるが、書物の性質上、総花的な記述にとどまることが惜しまれる。代表者も、以前、尾崎暢殃氏などとともに、『万葉集辞典』を刊行したことがあるが、きわめて不十分な結果に終わったことを、いまも遺憾に思っている。それゆえ、新たな万葉集辞典構想のための基礎研究として、『万葉集』の語彙研究がなされなければならないと考えたような次第である。

2. 研究の目的

「1. 研究開始当初の背景」に記したように、代表者は、10年余りの期間

を費やして、『万葉集』の注釈書である『万葉集全解』全7巻を完成させた。本研究では、その成果を縦横に活用することで、まったく新たな視点から、『万葉集』の語彙の研究を進め、より本格的な『万葉集辞典』構想のための基礎資料を作成することを目的とした。より具体的には、『万葉集全解』のデータベース化をはかり、そこから抽出された主要語彙を、表現論的視点から分析・研究することを目的とした。

3. 研究の方法

具体的には、『万葉集全解』の電子テキスト化をはかり、それをもととして基礎的な語彙を抽出し、表現論的視点からその分析・研究をおこなった。その際、代表者だけではなく、趣旨に賛同する6名の研究者とともに、万葉語誌研究会を組織し、おおよそ隔月ごとに研究会を開催して、それぞれの語彙研究の成果について発表と討議とを重ねてきた。

以下、各年度ごとの具体的な研究の方法について記す。2010年度は、まずは完成した『万葉集全解』の本文の電子データ化を進めた。そのデータを整理し、表現の類型を見定めた上で、枕詞・序詞などの喩的な表現について、言葉と言葉の接続のありようを詳細に検討するなど、基礎語彙を選び出す作業を行った。またこの基礎語彙を徹底的に検討するため、万葉語誌研究会を組織し、数度の研究会を開催した。

2011年度は、『万葉集全解』の電子データ化をほぼ完成させ、その中から基礎語彙として200語を選定し、それらにランク付けをおこなった。その基礎語彙について、万葉語誌研究会において、徹底した研究発表・討議をおこなった。

2012年度は、完成した電子データを、万葉語誌研究会の6名のメンバーに配布し、その上で、万葉語彙の中からランク付けして、さらに絞り込んだ150語について、ほぼ隔月に開催

した研究会において、メンバーの各人がそれぞれについて語誌をまとめ、その原稿化をはかった。代表者はそのうち40語を担当している。現時点で9割以上の原稿が集まっており、本年秋に筑摩書房から『万葉語誌』の書名での刊行が予定されている。

以上が具体的な研究方法となる。

4. 研究成果

国外への影響については、研究の性質上省略する。主要なものにのみ限定する。

(1) 2010年度においては、海外をも含めていくつかの口頭発表をおこなった。まず古事記学会での招待講演「古代の「言」と「音」」においては、古代の言語表現を分析する中で、「言」と「音」が、それぞれに秩序と非秩序の意味合いをもって存在したことをあきらかにした。さらに、中国東北大学(瀋陽)、イタリアピッコカ大学(ミラノ)において、『万葉集』の表現がもつ言葉の呪力のありようについて研究発表をおこなった。論文としては、「く采女」の背景「アマテラスの影」を公表したが、そこに本研究の成果が部分的に取り入れられている。短歌誌『礫』において「柿本人麻呂」についての長編論考を連載中だが、人麻呂の表現分析に際しても、本研究の成果を縦横に利用した。

(2) 2011年度においては、東方学会の第56回国際東方学者会議において、「注釈の方法意識——『万葉集』の注釈を通じて」と題する研究発表をおこなった。また昨年度、講演をおこなった「古代の「音」と「言」」を『古事記年報』(古事記学会)に学術論文として公表した。さらに全国大学国語国文学会『文学・語学』に「古代日本人

の時間意識」と題する学術論文を公表した。これは『万葉集』の語彙の分析を通じて、古代人の自然観を時間意識の中に探ったもので、古代人の精神の基底に受動的な世界観があったことをあきらかにした。また岩波書店刊の雑誌『文学』の特集「古事記を読む」を編集し、座談会「古事記研究の新段階」の司会をつとめるほか、学術論文「歌謡の表現の特性」を発表し、古代歌謡の表現を『万葉集』のそれと比較しつつ、表現史的視点に立つ新たな読解を試みるべきであることを提言した。

(3) 2012年度においては、上代文学学会大会において、「母の甜き乳をめぐって」と題する招待講演をおこなった。チ(乳・血)という言葉に内在する呪力(=生命力)の意義について、『万葉集』のみならず、記紀等の資料を用いてあきらかにした。なおこの講演も、同題で上代文学学会『上代文学』に学術論文として公表した。

(4) 本科学研究費の研究成果としてもっとも大きなものは、2012年度末に公刊した『古代文学の世界像』(岩波書店)である。420頁を越える著書で、『万葉集』に限らず、古代の言語表現の背後にある古代人の世界像がいかなるものであるかを、さまざまな視点からあきらかにしたものである。この成果は、表現論あるいは表現史の視点をもたないかぎり、古代文学の世界には迫れないことを提言しており、今後の古代文学研究にとって、大きな意味をもつ著作であると自負している。

(5) 最後に、未刊だが、本科学研究費のもっとも直接的な成果として、『万葉語誌』(筑摩書房)の刊行が予定されていることを挙げておきたい。これは『万葉集』の基礎語彙150語を、万

葉語誌研究会のメンバーが分担執筆したもので、これによって本格的な『万葉集辞典』の基礎が示しうると考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計8件)

- ①多田一臣、万葉から吹く風、ひととき、査読無 (依頼論文)、6号、2010、p. 49
- ②多田一臣、〈采女〉の背景、観世、査読無 (依頼論文)、77巻10号、2010、pp. 24-32
- ③多田一臣、アマテラスの影、『古代文学の創造と継承』(新典社)、査読無 (依頼論文)、2011、pp. 521-538
- ④多田一臣、古代の「言」と「音」、古事記年報、査読無 (依頼論文)、53号、2011、pp. 1-19
- ⑤多田一臣、古代日本人の時間意識、文学・語学、査読無 (依頼論文)、200号、2011、pp. 25-36
- ⑥多田一臣、歌謡の表現の特性、文学 (岩波書店)、査読無 (依頼論文)、13巻1号、2012、pp. 35-48
- ⑦多田一臣、母の甜き乳をめぐって、上代文学、査読無 (依頼論文)、109号、2012、pp. 17-31
- ⑧TADA Kazuomi、L'ese del waka. Spunti del Libro XVI del Man'yōshū, La Cultura Periodo Nara、査読無 (依頼論文)、1号、2013、pp. 135-143

[学会発表] (計3件)

- ①多田一臣、古代の「言」と「音」、古事記学会大会 (招待講演)、2010年6月19日、皇學館大学
- ②多田一臣、注釈の方法意識—『万葉集』の注釈を通じて、第56回国際東方学者会議 (招待講演)、2011年5月20日、日本教育会館
- ③多田一臣、母の甜き乳をめぐって、上代文学学会大会 (招待講演)、2012年5月12日、東海大学

[図書] (計1件)

- ①多田一臣、岩波書店、『古代文学の世界像』、2013、426頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

多田 一臣 (TADA KAZUOMI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・教授
研究者番号：50092268

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：